

雜詠日記

徐山猿声

谷川

修



静かな山でもないのに、  
黄塵の巷に猿の声  
がしたようだ。





毎年各々の巻を小冊子にすると、表紙裏にまねごとの序を記し、裏表紙の裏にはその年出会った美しい言葉を置いてしめくくりとした。この合冊本でもそれに倣うことにする。